

シリーズ

人権を
学ぶ場を
つくるとは④



変化につながる学びの場をめざして

Facilitator's LABO〈えふらぼ〉、VAW研究会 **栗本 敦子**さん くりもと あつこ

みなさんにとって参加型(ワークショップ形式)の場との出会いはどのようなものでしたか? そして、自分が人権を学ぶ場をつくるときに参加型を選ぶのはなぜですか? 「たまたま、なんとなく」「新しくおもしろそう」「自分にあってるから」など、いろんな答えがあるでしょう。

連載最終回の今回は原点に立ち返り、そもそもなぜ参加型なのか、そしてファシリテーターにとって大切なことは何かについて、私が日々考えていることを書きたいと思います。

■なぜ参加型なのか

「参加型」というのは手法を表す言葉ですが、どんな手法を選ぶかそれ自体が表すものがあります。「楽しいから」という理由で参加型を選んだ場合、そのワークショップは楽しいものになるでしょう。けれど人権を学ぶ場としては楽しいだけでは不十分です。

人権について学ぶことで目指すのはどういったことでしょうか。それは、自他を尊重し、差別に立ち向かい、人権尊重の社会をつくる、そうしたことが具体的に「できる」ようになることです。そのためには知識とともに、適切なスキル(技能)を身につけ、課題に向き合う姿勢をはぐくむことが必要です。自分の意見を表現し、他者の異なる意見を受けとめる。さまざまな方法で話し合い、ちがいをふまえて合意をつくる。めざす未来を共有し、具体的な手だてを考える。ワークショップの中での活動のすべてが、現実の社会にはたらきかけていく力をはぐくむためのステップとなります。

参加型を用いるということ自体が人権尊重の場をつくることであり、人権の学びは行動につながらなくてはならないと考えるからこそ参加型を選ぶのです。

そして、もちろん「楽しいから」でもあります。自分の力を発揮し、刺激しあってお互いの力を引き出していき、そんなエンパワーしあう関係を参加者とともにつくることのできるのですから。

■ファシリテーターとして大切にしたいこと

ワークショップを組み立てるときには、「わたし・あなた・みんな」の3つの柱を組み込むように考えます。「わたし」とは自分をうけとめ大切にすること、「あなた」とは他者を理解しお互いに尊重しあうこと、「みんな」とは社会の課題にむきあい解決の道をさぐることです。

この3つの柱は、ファシリテーターとして心がけたいことでもあります。

《わたし：自分自身を知り、引き受ける》

どんなことに関心があり、どんなことが苦手ですか。人権課題としてとりあげられるもののなかで詳しいもの、あまり知識がないものはどんなことでしょうか。よく使うアクティビティ、自分ではやったことのないアクティビティにはどんな種類のものがありますか。自覚することで、持ち味をいかしたファシリテーションができ、とりくむべき課題も明らかになります。

また、実際にファシリテーターとして参加者の前に立っているときの自分を理解することもとても大切です。時間が足りなくなってきたり、思いがけない質問に動揺していたり、参加者の発言に怒

りを感じていたり。そうした自分の内面を無視するのではなく、しっかりと受けとめましょう。認めたくらんで、ファシリテーターとしてどうするかを判断します。ファシリテーターという役割にとらわれ、自分自身を見失わないようにすることが大切です。その場にいるのは「わたし」というまるごとの存在なのです。自分を受けとめることができずに、参加者を尊重することはできません。学ぶ過程そのものが自分からはじまり、自分に返ってくるものなのかもしれません。

《あなた：参加者の力を信頼する》

ワークショップは参加者とともにつくる学びの場です。その場の参加者をパートナーとして尊重し、信頼することができているでしょうか。

実施に難しさを感じる設定の場合もあります。例えば参加者が初参加、苦手意識をもっている、いやいや参加している場合であったり、その集団における日常の力関係が大きい、動機や期待がバラバラ、などです。

現実の社会だって同じようなものです。みんなが人権に積極的な関心をもっているわけではありません。その現実を変えていくための学びが参加型なのです。参加型は、学習者を「教えられるべき無力な存在」とみるのではなく、「ゆたかな可能性をもった力のある存在」ととらえるところにその特徴があります。変化をおこす力は誰もがもっているのです。専門的な知識をもった特別な人が教え導くのではなく、一人ひとりが考え具体的に動くことで社会を変えていくのです。その信念をもって、参加者へ期待と信頼をもって問いかければ、必ず手ごたえはあります。

「どんな参加者か」ではなく、「どのように参加者を受けとめているか」が、ファシリテーターに問われるのです。

《みんな：ともに学び、変革するために問いかける》

人権を学ぶのは、ファシリテーターとして学ぶ場をつくるのは、何のためでしょう? そこには「こんな社会/未来をつくりたい」という思いや願いがあるはず。ファシリテーターは、それを語るのではなく、問いとして投げかけます。どのような題材をもちいれば、どういった視点からみれば、どんなふうにあつかえば、ともに考えることのできるのか。答えを提示するのではなく、問いをたてる。アクティビティの選択とプログラムの構成に伝えたい思いをこめ、問いかけを通して参加者とともについていくのがファシリテーターなのです。

私たちの社会や未来についての思いを分かち合い、何ができるのかを参加者と一緒に考えていくことができる、ファシリテーターをするというのは本当にわくわくすることです。

ブラジルの教育学者パウロ・フレイレは、教育についてこう述べています。「教育とは、未完成な人間が未完成な世界に批判的に介入し、世界を変革することを通して、自らを変革(解放)し続ける終わりのない過程である」

社会と自分を変えていく場をつくるファシリテーターとして、みなさんといつか出会えることを楽しみにしています。

Facilitator's LABO 〈えふらぼ〉

■e-mail…facilitators.labo@gmail.com

■blog …<http://d.hatena.ne.jp/f-labo/>